

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Commentaries on the Zhongguo xiaoshuo shilüe (Lu-xun's a brief history of Chinese fiction) (VIII)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1989-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中嶋, 長文, Nakajima, Osafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2254

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



中國小說史略考證 第八續

中 島 長 文

7 然作者蔚起、以至未幾同中書門下平章事

七三一五

寫印本『大略』八云、一、屬于異聞之前一類者。／沈既濟枕中記（廣記八十二題呂翁、今據文苑英華。）／開元七年道士呂翁行邯鄲道中、見旅中少年盧生侘傺息、乃探囊中枕授之日「笱？」、生夢娶清河崔氏、舉進士、官至陝牧、入爲京兆尹、出破戎虜、轉吏部侍郎、遷戶部尚書兼御史大夫、爲時宰所忌、以飛語中之、貶虢州刺史、三年徵爲常侍、未幾同中書門下平章事。鉛印本は「既入朝」を「後入朝」、「新唐書」を「唐書」に作るほか、沈既濟の生存期間を示す「約七五〇—八〇〇」の一句を缺くのみで『史略』に同じい。なお「後入朝」は「稗邊小綴」でもさう作るように『唐書』を襲うものであるが、訂正版ではじめて「既」字に改む。

「小説の變遷」第三講云、唐開元天寶以後、作者蔚起、和以前大不同了。中略。大歷中、先有沈既濟做的『枕中記』——這書在社會上很普通、差不多沒有人不知道的——內容大略說、有個盧生、行邯鄲道中、自嘆失意、乃遇呂翁、給他一個枕頭、生睡去、就夢娶清河崔氏。——清河崔屬大姓、所以得娶清河崔氏、也是極榮耀的。——并由舉進士、一直升官到尚書兼御史大夫。後爲時宰所忌、害他貶到端州。過數年、又追他爲中書令、封燕國公。後來衰老有病、呻吟床次、至氣斷而死。夢中死去、他便醒來、却尙不到煮熟一鍋飯的時候。——這是勸人不要躁進、把功名富貴、看淡些

的意思。到後來明人湯顯祖做的『邯鄲記』，清人蒲松齡做『聊齋』中的『續黃粱』，都是本這『枕中記』的。

『唐宋傳奇集』稗邊小綴全集卷十云、『枕中記』今所傳有兩本，一在『廣記』八十二、題作『呂翁』，注云出『異聞集』。一見于『文苑英華』八百八十三、篇名撰人名畢具。而『唐人說薈』竟改稱李泌作，莫喻其故也。沈既濟、蘇州吳人（『元和姓纂』云吳興武康人）經學該博，以楊炎薦，召拜右拾遺史館修撰。貞元時，炎得罪，既濟亦貶處州司戶參軍。後入朝，位吏部員外郎，卒。撰『建中實錄』十卷，人稱其能。『新唐書』（百三十二）有傳。既濟爲史家，筆殊簡質，又多規誨，故當時雖薄傳奇文者，仍極推許。如李肇，卽擬以莊生寓言，與韓愈之『毛穎傳』並舉（『國史補』下）。『文苑英華』不收傳奇文，而獨錄此篇及陳鴻『長恨傳』，殆亦以意主箴規，足爲世戒矣。

在夢寐中忽歷一世，亦本舊傳。晉干寶『搜神記』中卽有相類之事。云「焦湖廟有一玉枕，枕有小垢，時單父縣人楊林爲賈客，至廟祈求。廟巫謂曰，君欲好婚否。林曰，幸甚。巫卽遣林近枕邊，因入垢中。遂見朱樓瓊室，有趙太尉在其中。卽嫁女與林，生六子，皆爲祕書郎。歷數十年，並無思歸之志。忽如夢覺，猶在枕旁，林愴然久之。」（見宋樂史『太平寰宇記』百二十六引。現行本『搜神記』乃後人鈔合，失收此條。）蓋卽『枕中記』所本。明湯顯祖又本『枕中記』以作『邯鄲記傳奇』，其事遂大顯于世。原文呂翁無名，『邯鄲記』實以呂洞賓，殊誤。洞賓以開成年下第入山，在開元後，不應先得神仙術，且稱翁也。然宋時固已濶爲一談，吳曾『能改齋漫錄』趙與峕『賓退錄』皆嘗辨之。明胡應麟亦有考正，見『少室山房筆叢』中之『玉壺遐覽』。

『太平廣記』所收唐人傳奇文，多本『異聞集』。其書十卷，唐末屯田員外郎陳翰撰，見『新唐書』藝文志，今已不傳。據『郡齋讀書志』（十三）云，「以傳記所載唐朝奇怪事，類爲一書」，及見收于『廣記』者察之，則爲撰集前人舊文而成。然照以他書所引，乃同是一文，而字句又頗有違異。或所據乃別本，或翰所改定，未能詳也。此集之『枕中

『記』、即據『文苑英華』錄、與『廣記』之采自『異聞集』者多不同。尤甚者如首七句『廣記』作「開元十九年、道者呂翁經邯鄲道上、邸舍中設榻、施擔囊而坐」。『主人方蒸黍』作「主人蒸黃粱爲饌」。後來凡言「黃粱夢」者、皆本『廣記』也。此外尙多、今不悉舉。『右拾遺』とするのは早く戴望舒が『唐宋傳奇集』校讀記でいうように『唐書』に照して『左拾遺』とすべきである。『史略』本文は「左拾遺」に作る。また「貞元時」を「建中時」に改むべきことは、五七年版全集の『史略』に附された編者注が言うごとく、兩『唐書』德宗紀の建中二年の條の楊炎の失脚と死によって明らかである。これは「裨邊小綴」も同様に訂さなければならぬ。

『枕中記』の作者を李泌とするのは『唐人說薈』に先立ち明人の『虞初志』がそうする。

『元和姓纂』卷七云、沈中略。吳興 武康縣 漢光祿勳海昏侯沈戎後居會稽烏程吳興。中略。齊家唐秘書郎、生朝宗、

婺州武義主簿。朝宗生既濟克濟。既濟進士唐翰林學士、生傳師宏師述師。後略。

『新唐書』卷一三三沈既濟傳云、沈既濟、蘇州吳人。經學該明。吏部侍郎楊炎雅善之、既執政、薦既濟有良史才、召拜左拾遺、史館修撰。

初、吳兢撰國史、爲則天本紀、次高宗下。既濟奏議、以爲、「則天皇后進以彊有、退非德讓、史臣追書、當稱爲太后、不宜曰上。中宗雖降居藩邸、而體元繼代、本吾君也、宜稱皇帝、不宜曰廬陵王。睿宗在景龍前、天命未集、假臨大寶、於誼無名、宜曰相王、未容曰帝。且則天改周正朔、立七廟、天命革矣。今以周廟唐、列爲帝紀、考于禮經、是謂亂名。中宗嗣位在太后前、而敘年製紀反居其下、方之躋僖公、是謂不智。昔漢高后稱制、獨有王諸呂爲負漢約、無遷鼎革命事、時孝惠已歿、子非劉氏、不紀呂后、尙誰與哉。議者猶謂不可。況中宗以始年卽位、季年復祚、雖尊名中奪、而天命未改、足以首事表年、何所拘闕而列爲二紀。魯昭公之出、春秋歲書其居曰、「公在乾侯。」君在、雖失位、不敢廢也。請省天后紀合中宗紀、每歲首、必書孝和在所以統之、曰、「皇帝在房陵、太后行其事、改某制。」紀稱

中宗而事迹太后，名不失正，禮不違常矣。夫正名所以尊王室，書法所以觀後嗣。且太后遺制，自去帝號，及孝和上諡，開元冊命，而后之名不易。今耐陵配廟，皆以后禮，而獨承統于帝，是有司不時正，失先旨。若后姓氏名諱，才藝智略，崩葬日月，宜入皇后傳，題其篇曰「天順聖武皇后云。」議不行。

德宗立，銳于治。建中二年，詔中書、門下兩省，分置待官三十，以見官、故官若同正、試、攝九品以上者，視品給俸，至稟餼、幹力、什器、館宇悉有差，權公錢收子、贍用度。既濟諫曰：「今日之治，患在官煩，不患員少。患不問，不患無人。兩省官自常侍、諫議、補闕、拾遺四十員，日止兩人待對，缺員二十一員未補。若謂見官不足與議，則當更選其人。若廣聰明以收淹滯，先補其缺，何事官外置官。夫置錢取息，有司之權制，非經治法。今置員三十，大抵費月不減百萬，以息準本，須二十萬得息百萬，配戶二百，又當復除其家，且得入流，所損尤甚。今關輔大病，皆言百司息錢毀室破產，積府縣，未有以革。臣計天下財賦耗斲大者唯二事，一兵資，二官俸。自它費十不當二者一。所以黎人重困，杼軸空虛。何則。四方形勢，兵未可去，資費雖廣，不獲已爲之。又益以閑官冗食，其弊奈何。藉舊而置猶可，若之何加焉。」事遂寢。

炎得罪，既濟坐貶處州司戶參軍。後入朝，位禮部員外郎，卒。撰建中實錄，時稱其能。子傳師。

『舊唐書』卷一四九沈傳師傳云，沈傳師字子言，吳人。父既濟，博通羣籍，史筆尤工，吏部侍郎楊炎見而稱之。建中初，炎爲宰相，薦既濟才堪史任，召拜左拾遺，史館修撰。既濟以吳兢撰國史，以則天事立本紀，奏議非之。中略。事雖不行，而史氏稱之。

德宗初卽位，銳於求理。建中二年夏，敕中書、門下兩省，分置待詔官三十員，以見官前任及同正試攝九品已上，擇文學理道，韜鈴法度之深者爲之，各準品秩給俸錢、廩餼、幹力、什器、館宇之設，以公錢爲之本，收息以贍用。物

論以爲兩省皆名侍臣、足備顧問、無勞別置冗員。既濟上疏論之。中略。其事竟不得行。既而楊炎譴逐、既濟坐貶處州司戶。後復入朝、位終禮部員外郎。『史略』は沈既濟の傳として『新唐書』しかあげないが、『舊唐書』卷一四九の、子の傳師の傳にも附見する。

干寶『搜神記』焦湖廟玉枕については拙稿考證5—8を参照。 吳曾『能改齋漫錄』卷十八。 趙與峕『賓退錄』卷五。 『少室山房筆叢』卷四十四。

8 所引『枕中記』

七三六

寫印本、鉛印本『大略』いずれも同じ部分を引用する。前條8に述べるように、ここには『唐宋傳奇集』と同じく『文苑英華』卷八三三「寓言」から引用する。同書「寓言」に採録するものは王績「醉鄉記」、李華「鸚鵡狐記」とこの「枕中記」の三篇である。引用文中「生欠伸而悟」の上に『英華』では「虛」字があり、寫印本『大略』もそのように引くが、鉛印本で脱し以後氣附かれぬままになっている。「虛」字を補うべし。また「見其身方偃于邸舍」の「邸」字は、『英華』そのように作り、寫印本は正しく引くが、鉛印本で「旅」に誤り、以後訂されず、五七年版全集に至って「邸」に校訂せらる。他は『史略』各版句讀の符號にちがいはあるが大要に關しない。

増田氏日譯本『支那小説史』注云、清河崔氏 唐代の大家家で、普通のものとは結婚しなかった、だから崔氏の女を娶つたといふことは既に大した出世である、唐代の小説にあらはれる佳人には崔氏が多い、例へば『會真記』の崔鶯鶯の如し。

又云、生五子 五人の男子を産むことは唐人の理想的生殖であつたらしく、「五男二女」という吉語がある。

9 如是意想、以至失小説之意矣

七三一四

寫印本『大略』八云、此類文章、當時亦或病其俳諧、而譽之者以此擬韓愈毛穎傳。鉛印本は『史略』に同じい。「小説的變遷」は前條7に引く末尾を参照。「稗邊小綴」また同。千寶『搜神記』焦湖廟玉枕については考證5-7を参照。なお汪辟疆『唐人小說』按語は同時代の同じモチーフの作品として魯迅が第九篇に述べる李公佐『南柯太守傳』の他に「櫻桃青衣」(『太平廣記』二八一)をあげる。

『師弟答問集』第八頁云、A 臨川人湯顯祖ハ傳奇四種ヲ作り皆ナ夢ニ關スルヲ材料トス。ダカラ一般ニ「玉茗堂四夢」ト云ハレル。「邯鄲夢」毛實ハモト「邯鄲記」ト云フタノデ後人ガソレヲ「……夢」トシタノデス。魯迅の答のみが現存していて質問の方は失われたらしいが、答から質問の主旨は分る。

李肇『唐國史補』卷下云、沈既濟撰枕中記、莊生寓言之類。韓愈撰毛穎傳、其文尤高、不下史遷。二篇眞良史才也。古典文學出版社本「文苑英華」が「寓言」に枕中記を採録したのは少なくともこうした考え、つまり魯迅のいう「以意主篇幅、足爲世戒矣」(稗邊小綴)に據るものであろう。

「病其俳諧」とは具體的に誰のどのような言動を念頭において述べられたのか詳かでない。ただこの部分最も讀みやすいのは「稗邊小綴」である。あらためて引用すると、「既濟爲史家、筆殊簡質、又多規誨、故當時雖薄傳奇文者、仍極推許。如李肇、卽擬以莊生寓言、與韓愈之毛穎傳並舉(國史補下)」とある。「其の俳諧を病む」ということはそのままではないが、この文では「傳奇文を薄んず」に當たろう。「稗邊小綴」の文では韓愈の「毛穎傳」と並べて『枕中記』を「極めて推許」したのは李肇であり、ふだん「傳奇の文を薄んじ」ていた者も李肇である。ちなみに前に引用した『唐國史補』の次條には以下のようにある。「近代有造謗而著書、雞眼、苗登二文。有傳蟻穴而稱李公佐南柯太守。有樂妓而工篇什者、成都薛濤。有家僮而善章句者、郭氏奴不記者。皆文之妖也。」(これは「稗邊小綴」『南柯太守傳』の部分にも引かれる)夢中での話の展開というモチーフをもつ作品、『南柯太守傳』を「文妖」という

のであるから、引伸すれば當然「傳奇文を薄んず」ということになる。『稗邊小綴』には文脈上不都合なところは、何もない。

一方寫印本『大略』では既引のように、「其の俳諧を病む」者と「之を譽むる者」とは別人でなければならぬだろう。「之を譽むる者」はむろん李肇である。李肇は高文としての「毛穎傳」と並べて『枕中記』を評價したのだが、「毛穎傳」が最初「其の俳諧を病まれ」たのは有名な事實である。なかでも他ならぬ韓門弟子たる張藉から非難されたとする説は周知のものである。だがこれは吟味を要しよう。

張藉の「上韓昌黎書」にはいう。「……宣尼没後、楊朱墨翟、恢詭異説、干惑人聽。孟軻作書而正之、聖人之道、復存於世。……比見執事多尙駁雜無實之説、使人陳於前以爲歡。此有以累於令德。……況爲博塞之戲、與人競財乎。君子固不爲也。今執事爲之、以廢棄時日、竊實不識其然。……願執事絕博塞之好、棄無實之談。弘廣以接天下士、嗣孟軻揚雄之作、辯楊墨老釋之説、使聖人之道復見於唐、豈不尙哉。」そして再度の書でも「君子發言舉足、不遠於理、未嘗聞以駁雜無實之説爲戲也。執事每見其説、亦拊抃呼笑、是撓氣害性、不得其正矣」という。まるで道學者風の口ぶりだが、韓愈の博突好きと虚妄の話が好きなのを非難している。しかしこれは韓愈の返書にもいうように「吾子又譏吾與人人爲無實駁雜之説、此吾所以爲戲耳。比之酒色、不有間乎。吾子譏之、似同浴而譏裸裎也」、「駁雜無實の説」を人々に語らせ、自分も語って楽しんだのであって、「毛穎傳」がそのまま「駁雜無實の説」であるというわけではない。ただそういう雰囲気の中から「毛穎傳」が生まれた可能性が考えられるにすぎない。また馬其昶の校注（上海古籍出版社『韓昌黎文集校注』一九六・三三頁）がいうように張藉との往復書簡の時と「毛穎傳」の製作時期とが合わないことも考えられる。

張藉のことは措くとして、當時の一般士人の反應はむしろ「毛穎傳」を認めた柳宗元の「讀韓愈所著毛穎傳後題」という文に表われている。

自吾居夷、不與中州人通書。有來南者、時言韓愈爲毛穎傳、不能舉其辭、而獨大笑以爲怪、而吾久不克見。楊子誨之來、始持其書、索而讀之、若捕龍蛇、搏虎豹、急與之角而力不敢暇、信韓子之怪於文也。世之模擬竄竊、取青媿白、肥皮厚肉、柔筋脆骨、而以爲辭者之讀之也、其大笑固宜。且世人笑之也、不以其俳乎。而俳又非聖人之所棄者。詩曰、善戲謔兮、不爲虐兮。太史公書有滑稽列傳、皆取乎有益於世者也。後略。

柳宗元が反論している一般士大夫の考えかたは五代にも引きつがれ『舊唐書』の「毛穎傳」に對する評價も同じ色彩に染っている。その「韓愈傳」卷一六〇にはいう。「又爲『毛穎傳』、譏戲不近人情。此文章之甚紕繆者」。これも正しく「その俳諧を病ん」ものである。そうしたことを考えて寫印本『大略』を讀むならば、「當時云々」とは、『枕中記』の大歴年間以降唐末五代あたりまでの士大夫の間の、傳奇文に對する表て向きの一般的風潮を指すとみてよいかもしれない。そうなれば傳奇を評價しない一般的風潮に對して李肇は『枕中記』並びに「毛穎傳」に高い評價を與えたということになる。

ところでこれが『史略』になるとそうは讀めなくなる。「既濟文筆簡煉、又多規誨之意、故事雖不經、尙爲當時推重、比之韓愈『毛穎傳』、間亦有病其俳諧者、即以作者嘗爲史官、因而繩以史法、失小說之意矣。」ここでは文意は一般の傳奇文を指すのではなく、沈既濟の『枕中記』に限定されてしまふ。「作者」とは沈既濟であり、かれの作品『枕中記』に對して直接に「繩するに史法を以てし、小説の意を失し」た批評を行なう者と『枕中記』を推重して「毛穎傳」に比した李肇とは當然別人であるように讀める。その點では寫印本『大略』とちがわないのだが、「小説の意を

失し」た批評をした者は誰かということになると、寫印本『大略』のように一般的風潮といつて濟まされず、必ずその人があるはずである。ところがそれについては「稗邊小綴」も具體的に指摘しないし、わたしもまだそれを證する資料を捜しあてられないでいる。ただ李肇『唐國史補』の原文に戻つて考えるならば、かれが『枕中記』『毛穎傳』を推重したのは、「二篇眞に良史の才なる」が故であつて、決してそれらが傳奇文であつたからではない。したがつて李肇は『枕中記』を高く評價はしたが、評價の基準が文學のそれとはちがつており、「繩するに史法を以てし、小説の意を失し」たのも他ならぬ李肇その人である。ここで推重したのも李肇であれば、「其の俳諧を病んで、小説の意を失し」たのもまた李肇ということになる。そしてそうした意を述べるのであれば、「稗邊小綴」のように書いたあと、「顧亦以作者嘗爲史官、因而繩以史法、失小説之意矣」とでも補えば濟むところである。

ここにはやはり少し混亂があるように思われる。「稗邊小綴」が定稿になつたのは、一九二七年八月である。むろんそれまでに『史略』を講義する過程で腹案があつたにちがいないが、ともかくわれわれの見得る定稿は一九二七年に作られ、まとまつた小説史關係の著述のうちでは最も遅い。それで寫印本と鉛印本『史略』とのちがいが及びここに見られる混亂を考える際、いちおう考慮の外に置いてよいだろう。とするとすでに述べた寫印本『大略』から鉛印本への過程で起きた、總論部分と『枕中記』との二つの記述への書き分けがきっかけとなつて混亂が生じたものと思われる。つまり『大略』寫印本の「亦た或もの其の俳諧を病む」が鉛印本の「時に亦た俳諧に近し、故に論者毎に其の卑下を警る」という記述になつたにもかかわらず、依然『枕中記』の記述中に殘され、いま見るような行文になつたのではないか。殘つた「亦た或もの其の俳諧を病む」の一句がひとり歩きしたのである。魯迅の文章にこの種の混亂はあまりないから異とすべきだが、『觀佛三昧海經』の例(5-18)もあるので、いちおうそう考えておく。但し以

上の議論はすべて「病其俳諧者」に具體的な例がないものとの假定の上に立つので、それが出て來れば讀みはむろんもっと明解なものになって甚解は不要となる。待考。なお問題の記述の前半は、『南柯太守傳』の次のような叙述を約した氣味がある。「雖稽神語怪、事涉非經、而竊位著生、冀將爲戒。後之君子、幸以南柯爲偶然、無以名位驕於天壤間云。」これは史傳では論贊の論に當る部分である。

10 既濟又有『任氏傳』一篇、以至亦諷世之作也

七四十二

寫印本『大略』八云、既濟又有任氏傳（廣記四百五十二）、記妖狐幻化、守忠殉人、「雖今之婦人有不如者」、亦諷世之作也。鉛印本は『史略』に同じ。

『唐宋傳奇集』稗邊小綴全集卷十云、『任氏傳』見『廣記』四百五十二、題曰任氏、不著所出、蓋嘗單行。「天寶九年」上原有「唐」字。案『廣記』取前代書、凡年號上著國號者、大抵編錄時所加、非本有、今刪。他篇皆仿此。

11 「吳興才人」、以至尤與同時文人興趣

七四十五

寫印本『大略』八云、臣之有又湘中怨辭異夢錄二篇、亦記華恍惚之事、而好言仙鬼之死、與同時文人絕殊。「華」字の下に單校・榮校ともに「艶」字を補う。鉛印本は「李賀語」〔約八世紀末至九世紀中〕がなく、「能創窺窺之思」を「善打窺窺之思」に作る他は『史略』に同じ。

『唐宋傳奇集』稗邊小綴云、李賀『歌詩編』(一)有「送沈亞之歌」、序言元和七年送其下第歸吳江、故詩謂「吳興才人怨春風、桃花滿陌千里紅、紫絲竹斷驄馬小、家住錢塘東復東。」中復云「春卿拾才白日下、擲置黃金解龍馬、攜笈歸江重入門、勞勞誰是隣君者」也。然『唐書』已不詳亞之行事、僅於「文苑傳序」一舉其名。幸『沈下賢集』迄今尚存、并考宋計有功『唐詩紀事』元辛文房『唐才子傳』、猶能知其概略。亞之字下賢、吳興人。元和十年、進士及第、

歷殿中侍御史內供奉。太和初爲德州行營使者柏耆判官。耆貶、亞之亦謫南康尉、終郢州掾。其集本九卷、今有十二卷、蓋後人所加。中有傳奇三篇。亦並見『太平廣記』、皆注云出『異聞集』、字句往往與集不同。今者據本集錄之。後略。

李賀『送沈亞之歌』、『歌詩編』卷二云、文人沈亞之、元和七年、以書不中第、返歸於吳江。吾悲其行、無錢酒以勞、又感沈之勤請、乃歌一解以送之。吳興才人怨春風、桃花滿陌千里紅。紫絲竹斷驄馬小、家住錢塘東復東。白藤交穿織書笈、短策齊裁如梵夾。雄光寶礦獻春卿、烟底鸞波乘一葉。春卿拾才白日下、擲置黃金解龍馬。攜笈歸江重入門、勞勞誰是憐君者。吾聞壯夫重心骨、古人三走無摧挫。請君待旦事長鞭、他日還轅及秋律。

『唐詩紀事』卷五一云、沈亞之、字下賢。登進士第。大和初、李同捷反、詔兩河諸鎮出兵、久無功、乃授柏耆德利〔州〕行營諸軍計會使、亞之以殿中侍御史爲判官諭旨。會李祐平德州、同捷窮、請降、耆乃馳入滄、誅同捷。諸將嫉其功、比奏攢讖。文宗不獲已、貶耆循州司戶參軍、亞之南康尉。張祜以詩送云、秋風江上草、先是客心摧。萬里故人去、一行新鴈來。山高雲緒斷、浦迴日波頽。莫怪南康遠、相思不可裁。亞之、吳人、元和七年下第、李賀以詩送云、後略。中華書局本。

『唐才子傳』卷六云、沈亞之、字下賢、吳興人。初至長安、與李賀結交、舉不第、爲歌以送歸。元和十年、侍郎崔羣下進士。以下ほとんど『郡齋讀書志』(後出)の記述を襲う。略。有集九卷傳世。

『唐宋傳奇集』稗邊小綴云、『沈下賢集』今有長沙葉氏觀古堂刻本、及上海涵芬樓影印本。二十年前則甚希觀。余所見者爲影鈔小草齋本、既錄其傳奇三篇、又以丁氏八千卷樓鈔本校改數字。同是十二卷本『沈集』、而字句復頗有異同、莫知孰是。如王炎詩『擇水菲金釵』、惟小草齋本如此、他本皆作『擇土』。頗亦難遽定『擇水』爲誤。此類甚多、今亦不備舉。印本已漸廣行、易于入手、求詳者自可就原書比勘耳。

『新唐志』集錄別集類云、沈亞之集九卷。

『郡齋讀書志』卷十八云、沈亞之集十卷、右唐沈亞之、字下賢。長安人。元和十年進士、涇原李燾辟掌書記、爲秘書省正字。長慶初、補櫟陽尉、四年爲福建都團練副使、事徐晦。後累進殿中丞御史內供奉。大和三年、柏耆宣慰德州、取爲判官。耆罷、亞之貶南康尉。後終郢州掾。亞之以文詞得名、狂躁貪汚、曾輔耆爲惡、故及於貶。嘗遊韓愈門、李賀、杜牧、李商隱俱有擬下賢詩、亦當時名輩所稱許云。此本之後、有景文宋公題字、稱得之於端明李學士。編次無倫、蓋唐本也。予頗愛其能造語、然其本極舛誤、頗是正之。且哀其遺闕者數篇及賀牧商隱三詩附於後。王氏校本。袁本「八卷」に作り、且つ「此本之後」以下を缺く。

『直齋書錄解題』卷十六云、沈下賢集十二卷案文獻通考作十卷。唐福建團練副使吳興沈亞之下賢撰。元和十年進士、仕不出藩府。長慶中爲櫟陽尉、太和中謫掾郢州、皆集中可見者也。吳興者著郡望、其實長安人。なお沈亞之の籍貫については余嘉錫『四庫提要辨證』卷二十に詳しい考證がある。

魯迅が「稗邊小綴」で「其集本九卷」と書くのは『新唐志』及び『唐才子傳』に據っている。またそこで計有功の『唐詩紀事』と『唐才子傳』しか挙げないのは、おそらく『郡齋讀書志』集部の記事を見落したためだろう。

魯迅が見た『沈下賢集』は「稗邊小綴」にあげる四本である。觀古堂刻本は「日記」一九一二年六月九日に「琉璃廠、善化董氏刻本沈下賢集一部二冊、二元五角」とあるのがそれで、これには善化の童光漢の新刊序が附いている（童氏の序のない刊本もある）。上海涵芬樓影印本とはつまり四部叢刊本、「明翻宋本」と稱するもの。影鈔小草齋本は、明謝在杭小草齋鈔本（丁氏善本書室舊藏）を抄寫したものである。魯迅はそれをおそらく一九一二年壬子、南京の臨時政府教育部員になった時に借覽することができ、他人にも頼んで抄寫してもらった。その抄本は『魯迅手蹟目錄』

(一九五九・北京魯迅博物館)に「沈下賢文集二册(三頁)又二條 以八千卷樓鈔本校 存北京圖書館」とあり、「日記」一九一三年三月三十日に「收二弟寄沈下賢集抄本二册」とあるものである。八千卷樓抄本とは同じく丁氏の舊藏に系するもので『八千卷樓書目』に小草齋抄本と並べ挙げられるもう一つの抄本である。そしてこの影鈔小草齋抄本はさらに觀古堂本とも對校してある。そしてそれを彼は一九一四年の四月六日から五月二十四日まで一月半をかけて清寫して定本を作った。『魯迅手蹟目錄』に「沈下賢文集二册(三頁)存北京圖書館」とするものである。この二つの抄本は、一九八五年『魯迅輯校古籍手稿』第五函に收められた。以上四本であるが、基本的には書の内容の構成も同じ同系統の十二卷本である。もつとも現在に傳存するのは、すべて同一系統のテキストで、それ以外にないのであるが。

「今集中有傳奇文三篇。」三篇とはむろん下にあげる『湘中怨』『異夢錄』『秦夢記』である。『沈下賢集』にはこの他に「馮燕傳」「李紳傳」「郭常傳」「喜子傳」(いずれも卷四)「歌者葉記」(卷五)があつて、これらを傳奇とみなすものもある。なかでも「馮燕傳」は『太平廣記』がすでに小説とみなして卷一九五に収録して以來、各種の小説の叢書に採られてきた。汪辟疆の『唐人小說』にも採られたが、汪氏はその按語に「按馮燕事、在唐時盛傳。其見諸詩歌者、則有司空圖之馮燕歌、至宋曾布又演其事、爲水調大曲。皆本沈下賢傳而衍爲長篇者也。舊唐書賈耽傳、耽以貞元二年改檢校右僕射、兼滑州刺史、義成軍節度使。至九年五月、徵爲右僕射、同中書門下章事。傳中言賈耽在滑以狀上聞、則馮燕事、當在貞元二年至九年之間。流傳數十年、沈氏始據元和中外郎劉元鼎之語、而爲此傳。司空表聖又爲作馮燕歌。並載本集。則其事固當時實錄也。」と述べる。要するに實錄であつて史傳の文に屬するものである。また「李紳傳」が歴史に徵することができるほか、他の篇はすでに主人公の實在を證することができないけれども、いずれもほとんど實錄であつてそこに「意識的な創造」つまり虚構を認めがたい。そのため魯迅は傳奇を上記の三篇に限つたのである。

なお「仙鬼復死」するを言うのは「秦夢記」のみである。

「沈下賢集」卷二卷四の「四」字、『大略』鉛印本から三十年集版に至るまですべて「三」に作る。五七年版全集で「四」に訂された。「稗邊小綴」も後に見えるように「異夢錄見集卷三」とする。

『廣記』二百八十二も『大略』鉛印本から三十年集版まで「二百八十三」に作るが、五七年版全集で訂された。『湘中怨』、以至竟失所在

七十一

寫印本『大略』は前條11に引く所のみ。鉛印本は『史略』に同じい。

『唐宋傳奇集』稗邊小綴云、『湘中怨辭』出『沈下賢集』卷二。『廣記』在二百九十八、題曰太學鄭生、無序及篇末「元和十三年」以下三十六字。文句亦大有異、殆陳翰編『異聞集』時之所刪改歟。然大抵本集爲勝。其「遂我」作「逐我」、則似『廣記』佳。惟亞之好作澀體、今亦無以決之。故異同雖多、悉不復道。『文集』は「湘中怨解」に作る。魯迅は言及

しないが『文苑英華』卷三五八も「騷」として引き標題を同様に作る。これは『文集』と『麗情集』に據って校勘がなされている。

なお「湘中

怨」文末に出る「南昭嗣烟中之志」との関係について戴望舒『唐宋傳奇集』校讀記は次のように指摘する。「按、南昭嗣名卓、有『羯鼓錄』『南卓解題叙』。會昌元年爲洛陽令（見『羯鼓錄』）、『烟中之志』似卽『綠窗新話』卷上所載「謝生娶江中水仙」條、蓋取自『南卓解題叙』者、『麗情集』亦收此篇、題「烟中怨」。（『小説戲曲論集』一九五八・作家出版社）。後れて汪辟疆『唐人小説』新版も略同じことをいう。

13 『異夢錄』、以至王嘉賞之

七十一

寫印本『大略』八云、異夢錄之末有云、姚合曰、吾友王炎者、元和初、夕夢遊吳。侍吳王久、聞宮中出輦、鳴笳簫擊鼓、言葬西施。王悼悲不止、立詔詞客作挽歌。炎遂應教、詩曰、西望英王國、雲書鳳字牌、連江起珠帳、擇水葬金釵、滿地紅心草、三層碧玉階、春風無處所、悽悽不勝懷。詞進、王甚嘉之。及寤能記其事。炎、本太原人也。鉛印本

この引用を削つて『史略』と同じ。

『唐宋傳奇集』稱邊小綴云、『異夢錄』見集卷三。唐谷神子已取以入『博異志』。『廣記』則在二百八十二、題曰「邢鳳」、較集本少二十餘字、王炎作王生。炎爲王播弟、亦能詩、不測『異聞集』何爲沒其名也。『沈下賢集』今有長沙葉氏觀古堂刻本、及上海涵芬樓影印本。二十年前則甚希覯。余所見者爲影鈔小草齋本、既錄其傳奇三篇、又以丁氏八千卷樓鈔本校改數字。同是十二卷本『沈集』、而字句復頗有異同、莫知孰是。如王炎詩「擇水葬金鈔」、惟小草齋本如此、他本皆作「擇土」。顧亦難遽定「擇水」爲誤。此類甚多、今亦不備舉。印本已漸廣行、易于入手、求詳者自可就原書比勘耳。四部叢刊本、觀古堂本いずれも「擇水」に作る。戴氏「校讀記」は「西望吳王國、雲書鳳字牌。連江起珠帳、擇水葬金鈔。滿地紅心草、三層碧玉階。春風無處所、悵恨不勝懷。按、〃擇水〃當作〃擇土〃爲是、下有〃滿地紅心草〃句可證。」（『小説戲曲論集』）という。

夢中見舞弓彎、亦見于唐時他種小説。段成式『酉陽雜俎』（十四）云、『元和初、有一士人、失姓字、因醉臥廳中。及醒、見古屏上婦人等悉於牀前踏歌。歌曰、「長安女兒踏春陽、無處春陽不斷腸。舞袖弓腰渾忘卻、蛾眉空帶九秋霜。」其中雙鬢者問曰、「如何是弓腰？」歌者笑曰、「汝不見我作弓腰乎？」及反首、髻及地、腰勢如規焉。士人驚懼、因叱之。忽然上屏、亦無其他。」其歌與『異夢錄』者略同、蓋卽由此曼衍。宋樂史撰『楊太真外傳』、卷上注中記楊國忠臥觀屏上諸女下牀自稱名、且歌舞。其中有「楚宮弓腰」、則又由『酉陽雜俎』所記而傳訛。凡小說流傳、大率漸廣漸變、而推究本始、其實一也。

14 『秦夢記』、以至所引『秦夢記』

七二〇

寫印本『大略』八云、沈亞之秦夢記（沈下賢集卷二）／太和初、亞之道經長安、客棗泉邸舍、夢爲秦官有功、時弄玉婿蕭史先死、因尙公主、自〔題〕脫所居〔曰〕脫翠微〔宮〕。穆公遇甚厚、一日公主忽言「無」字の誤疾卒、公不復欲見亞

之、遂遺之歸。『秦夢記』直接の引用は一二の誤字を除き、鉛印本、『史略』に同じい。

『唐宋傳奇集』稗邊小綴云、『秦夢記』見集卷二、及『廣記』二百八十二、題曰「沈亞之」、異同不多。「擊體舞」當作「擊轉舞」、「追酒」當作「置酒」、各本俱誤。「如今日」之「今」字、疑衍、小草齋本有、他本俱無魯迅の見た黄刻本『太平廣記』は「擊體舞」に作る。中華書局本『廣記』は明鈔本に據って「擊轉舞」に改めているが、いずれも意を得ず、魯迅のいうごとく「體」に作るのが正しい。「如今日」上海涵芬樓影印本即四部叢刊本も「今」字有り。

「客棗泉邸舍」三版以後、五七年版全集まで「家」に誤る。

「置酒」『大略』鉛印本、初版では「追酒」に作ったが、二版以降は「稗邊小綴」の説どおり「置酒」に改められた。「非其神靈憑乎」三版から七版まで「青」に誤る。

増田涉譯『支那小説史』注云、蕭史 簫吹きの名人で、秦の穆公はその女弄玉を彼に妻にして弄玉に簫を吹くことを習はせた。後、弄玉は鳳に乗り蕭史は龍に乗つて飛昇し去つた、といふ故事が「列仙傳」にある。

15 陳鴻爲文、以至蓋後人又増損之

七五十五

寫印本『大略』九云、陳鴻有東城老父傳（廣記四百八十五）記賈昌於兵火之後、憶念太平盛事、榮華零落、兩相比照、其語甚悲。又有長恨傳（廣記四百八十八）亦於元和間追述開元中楊妃入宮以至死蜀本末、法與賈昌傳同。白居易作歌、故此傳特爲世間所識、楊妃軼事、唐人本所樂道、然少有條貫秩然如此傳者、宋人樂史作楊太眞外傳二卷、記事較詳、而辭意俱遜、清人洪昇取以作傳奇、名長生殿、亦嘗傳誦一時。寫印本では「唐傳奇體傳記（下）」の「屬於逸事之後一類者」として最後に記述する。鉛印本は「史略」の「鴻少學爲史…在長安時」（「稗邊小綴」に引く「大統記」序による履歷）まで、を單に「鴻嘗學秀才」の一句に作る。また「或亦其人也」を「或即其人」に作り、その後の「約八世紀後半至九世紀中葉」を缺き、「則作于元和初、亦追述」二云は寫印本

の如くに作る。「法興」「賈昌傳」相類」も寫印本に同じい。他は基本的に「史略」に同じい。

「小説の變遷」第三講云、此外還有一個名人叫陳鴻的、他和他的朋友白居易經過安史之亂以後、楊貴妃死了、美人已入黃土、憑吊古事、不勝傷情、於是白居易作了『長恨歌』、而他便作了『長恨歌傳』。此傳影響到後來、有清人洪昇所做的『長生殿』傳奇、是根據它的。

『唐宋傳奇集』稗邊小綴云、二十年前、讀書人家之稍豁達者、偶亦教稚子誦白居易『長恨歌』。陳鴻所作傳因連類而顯、憶『唐詩三百首』中似卽有之。而鴻之事迹頗晦、惟『新唐書』藝文志小說類有陳鴻『開元升平源』一卷、注云、「字大亮、貞元主客郎中。」又『唐文粹』(九十五)有陳鴻『大統紀』序云「少學乎史氏、志在編年。貞元丁(案當作乙)酉歲、登太常第、始聞居遂志、迺修大統紀三十卷……。七年、書始成、故絕筆于元和六年辛卯。」『文苑英華』(三九二)有元稹撰「授丘紆陳鴻員外郎制」云、「朝議郎行太常博士上柱國陳鴻堅于討論、可以事舉、可虞部員外郎。」可略知其仕歷。『長恨傳』則有三本。一見于『文苑英華』七百九十四。明人又附刊一篇于後、云出『麗情集』及『京本大曲』、文句甚異、疑經張君房輩增改以便觀覽、不足據。一在『廣記』四百八十六卷中、明人掇以實叢刊者皆此本、最爲廣傳。而與『文苑』本亦頗有異同、尤甚者如「其年夏四月」至篇末一百七十二字、『廣記』止作「至憲宗元和元年、蟄屋尉白居易爲歌以言其事。并前秀才陳鴻作傳、冠于歌之前、目爲『長恨歌傳』」而已。自稱前秀才陳鴻、爲『文苑』本所無、後人亦決難臆造、豈當時固有詳略兩本歟、所未詳也。後文參照。今以『文苑英華』較不易見、故據以入錄。然無詩、則以載于『白氏長慶集』者足之。

『五色線』(下)引陳鴻長恨傳云、「貴妃賜浴華清池、清瀾三尺、中洗明玉、既出水、力微不勝羅綺。」今三本中均無第二三語。惟『青瑣高議』(七)中『趙飛燕別傳』有云、「蘭湯灑灑、昭儀坐其中、若三尺寒泉浸明玉。」宋秦醇

之所作也。蓋引者偶誤、非此傳逸文。『四庫提要』卷一四四、小說家類存目三云、五色線一卷、不著編輯者名氏。載毛晉津逮秘書中。考中興館閣書目有此書名、然是書雜引諸小說新誕之語、或不紀所出、割裂舛謬、不可枚舉、至謂楚襄王夢神女事出史記、其庸妄可知。未知果宋時舊本否也。』この部分は魯迅が『麗情集』の「長恨歌傳」を引きながら、『五色線』所引の文が他ならぬ『麗情集』からのものであることを見逃したところである。次に引く汪辟疆『唐人小說』（已在初版）の按語は魯迅の杜撰を指したものである。「明刻文苑英華、本傳後附刊一篇、云出麗情集及京本大曲。又與英華廣記兩本不同。尤甚者、如『詔浴華清池、清瀾三尺、中洗明玉。連開水上、竊舞鑑中。既出水、嬌多力微、不勝羅綺。』皆爲二本所無。宋秦醇趙飛燕別傳所謂『蘭湯灑灑、昭儀坐其中、若三尺寒泉浸明玉。』爲胡應麟所特賞者、則又沿襲此文而依託者也。宋人所撰五色線引『清瀾三尺、中洗明玉』數語、云出陳鴻長恨歌傳。後人但據廣記、頗疑五色線所引、不載傳中、而斷爲誤引飛燕別傳。則是明刊文苑英華所附引之麗情集、固未嘗寓目也。』

本此傳以作傳奇者、有清洪昉思之『長生殿』、今尙廣行。蝸寄居士有雜劇曰『長生殿補闕』、未見。王國維『曲錄』卷五云、長生殿補闕一本二齣、古柏堂傳奇刊本。右國朝唐英撰、英字雋公、號蝸寄居士、官九江關監督。

『東城老父傳』出『廣記』四百八十五。『宋史』藝文志史部傳記類著錄陳鴻『東城父老傳』一卷、則會單行。傳末賈昌述開元理亂、謂「當時取士、孝悌理人而已、不聞進士宏詞拔萃之爲其得人也。」亦大有敘「開元升平源」意。又記時人語云、『生兒不用識文字、鬪雞走馬勝讀書。賈家小兒年十三、富貴榮華代不如。』同出于陳鴻所作傳、而遠不如『長恨傳』中「生女勿悲酸、生男勿喜歡」之爲世傳誦、則以無白居易爲作歌之爲之也。

『資治通鑑考異』卷十二所引有『升平源』、云世以爲吳兢所撰、記姚元崇藉騎射邀恩、獻納十事、始奉詔作相事。司馬光駁之曰、「果如所言、則元崇進不以正。又當時天下之事、止此十條、須因事啓沃、豈一旦可邀。似好事者爲之、依託號名、難以盡信。」案兢、汴州浚儀人、少勵志、貫知經史。魏元忠薦其才堪論議、詔直史館、修國史。私撰『唐書』『唐春秋』、敘事簡核、人以董狐目之。有傳在『唐書』（舊一百二新一三二）『開元升平源』『唐志』本云陳鴻作、

『宋史』藝文志部故事類始著吳兢「貞觀政要」十卷、又『開元升平源』一卷。疑此書本不著撰人名氏、陳鴻、吳兢、並後來所題。二人于史皆有名、欲假以增重耳。今姑置之『東城老父傳』之後、以從『通鑑考異』寫出、故仍題號名。後に岑仲勉『唐史餘瀝』（卷二「姚崇十事」）で『通鑑考異』所引「開元昇平源」の陳鴻作者説を、王夢鷗「東城老父傳作者辨」（『唐人小說研究』四集）で、「東城老父傳」こそ「開元昇平源」であって、『通鑑考異』のものは別の「昇平源」にすぎないとする説を倡えている。

『師弟答問集』第八頁云、B「登太常第」ハ即チ「進士及第」デス。直譯スレバ「太常（禮部）ニ試験ヲ受ケテ第二登ボタ」ノコトデス。特ニ「太常」ト書クノハ唐ノ始メニハ禮部デ試験ヲヤッタノデハ無カタカラデス。或ハ進士及第ト譯シタ方ガワカリヤスイカモ知レマセン。又『全集』第一三卷、三三〇六二五増田涉宛書簡。進士の試験が禮部の管轄になったのは開元二十四年（七三六）以降である。

『登科記考』卷十五云、陳鴻 陳鴻大統紀序云、貞元丁酉歲、登太常第、始聞居修大統紀三十卷、七年書始就、絶筆乎元和六年辛卯。按貞元無丁酉、以七年至辛卯推之、卽此年乙酉之訛、是鴻於此年登第。 白居易於元和元年十二月作長恨歌、其序稱前進士陳鴻。

『新唐志』子部小說家類云、陳鴻『開元升平源』一卷字大亮、貞元主客郎中。注の「貞元主客郎中」については後に岑仲勉「郎官石柱題名新考訂」（一九八四・上海古籍出版社）に云う。「主客郎中、存疑。陳鴻『新唐書・藝文志』注「貞元主客郎中」、上載乃「貞元進士」之誤奪、餘下「主客郎中」四字、在文獻上未獲他證。『全唐文』六一二小傳稱「鴻、大和三年官尚書主客郎中」、更近乎鑿空、詳説見「唐史餘瀝」七七八一八〇頁、應入存疑。」（二八四頁）。貞元末年の進士が貞元年間の主客郎中になるわけがないというのである。これより先に『戴望舒』「唐宋傳奇集」校讀記にもそれに言及する。

『東城老父傳』 『廣記』卷四八五に陳鴻撰として収録され、『宋志』史部傳記類に陳鴻「東城老父傳一卷」と著録される。話の引き出し役として登場するのが「潁川陳鴻祖」であるところから『虞初志』は陳鴻祖撰として収録し、

『全唐文』に至って陳鴻とは別に陳鴻祖の項目をたててこの一篇を収めた。民國になって魯迅は『史略』で陳鴻の作として叙述したが、作中人物「陳鴻祖」には言及しない。汪辟疆『唐人小説』も魯迅の見方に倣っているが、戴望舒の『唐宋傳奇集』校讀記で、「按、此篇〔東城老父傳〕陳鴻祖撰。其名四見傳中、(其一作洪祖)與「長恨歌傳」作者非一人。」と言ひ、さらに陳寅恪が「讀東城老父傳」(二九〇)・『金明館叢稿初編』所收)の冒頭で「傳文中作者自稱其名凡四處。中略。是此傳作者之名爲鴻祖、絕無疑義、而廣記所以題陳鴻之故、殆由傳寫者習知長恨歌傳撰人卽太和時主客郎中宇大亮之陳鴻姓名、遂致譌耳。中略。近日學人有考證此傳者、亦襲舊誤、混陳鴻與陳鴻祖爲一人。且云、清修全唐文、錄鴻文三篇、而此二篇(指此傳及長恨歌傳)不收。蓋偶爾失檢、未足爲病也。」と述べて、陳鴻祖説を主張した。文中の「近日學人云々」は直接には汪辟疆の『唐人小説』をさすが、魯迅の意見も汪氏に近いものである。これに對して汪氏は新版『唐人小説』で「又按近有疑此傳爲陳鴻祖作者、因本傳後段敘及潁川陳鴻祖訪問賈昌問開元理亂之原、其必爲鴻祖撰傳無疑。惟此傳相傳已久、宋時所編太平廣記及宋史藝文志對於撰人、皆無異説。今姑存之、以待考定。」と述べて陳氏の説に贊同を留保した。それ以後に近藤春雄「歴史小説東城老父傳」(昭和五)・『唐代小説の研究』所收)、王夢鷗「東城老父傳作者辨」(民國六)・『唐人小説研究』第四集所收)が、陳鴻説を倡え、周紹良が「『東城老父傳』箋證」(『紹良叢稿』一九四)・齋魯書社)で陳鴻祖説を倡える。決定的な證據がないなかで、魯迅が作品に即して「長恨歌傳、法與『賈昌傳』相類」というのが最も説得力があるように思う。

唐五代に於いて「楊妃故事」をいうものには、「明皇雜錄」「譚賓錄」「瀟湘錄」「開天傳信記」「開元天寶遺事」等がある。なお後代影響の著しいものには、『長生殿傳奇』の他に、元代白朴の元曲『唐明皇秋夜梧桐雨』がある。

『史略』は「傳今有數本」といって、『廣記』、『文苑英華』それに明版『文苑英華』附載の『麗情集』及び『京本大

曲』の三本を擧げる。これは「稗邊小綴」も同じである。ところで「長恨歌」を作った白居易の文集が最初友人の元稹によって編まれて『白氏長慶集』と題され、後居易自身手づからその『文集』前後二集を編んだことはよく知られた事實である。「長恨歌」は「長恨歌傳」の跋に明らかのように元和元年（八〇六）十二月の作であるから、長慶四年（八〇四）の『白氏長慶集』五十巻のうちになつたことは疑いない。いまに残る最も古い刊本である南宋紹興刊本（九五・文學古籍社影印）はすでに編次は白居易自編のそれではないけれども、その巻二の「長恨歌」の前には「前進士陳鴻撰」の「長恨歌傳」が刻されている。そして日本翻刻の那波道圓本をはじめ、系統の異なるテキストもみな南宋刊本と同じ體裁を採っている。そのことは元稹が編んだか、あるいは後れて白氏自編本の時點ですでにそういう形であつたと考えてよいだろう。したがって「長恨歌傳」のテキストとしては『白氏文集』に附刻されたものを先ず最初にあげねばならない。魯迅が『唐宋傳奇集』に「長恨歌傳」を収録する際、『文苑英華』は「長恨歌」を附載しないからといってわざわざ『白氏長慶集』に依つて補っているにもかかわらず、その前に附された「長恨歌傳」に言及しないのは腑に落ちない。魯迅の後の汪氏『唐人小説』も同じく『白氏文集』を落している。以上テキストは大まかにいって四本現存する。

さらに「長恨歌傳」ならびに「長恨歌」を収録する『廣記』卷四八五は出處を記さない。この卷に前後して收められる唐代傳奇の代表的な作品、たとえば「柳氏傳」「東城老父傳」「無雙傳」「霍小玉傳」「鶯鶯傳」などは、「出異聞集」と注記する「李娃傳」を除いてすべて出處を示さない。出處を注記しないものでも「柳氏傳」「霍小玉傳」などは南宋曾慥の『類說』に依つて『異聞集』に入っていたことが分るが、『廣記』の採録に當つてはいちおう單行のものから採つた可能性も考えられる。ことに白居易の作品については、『廣記』の採集書目に『白居易集』とあり、

實際に卷三四に「王喬老」一篇を引き、末尾に「出白居易集」と注記する。この一篇はいまの『白氏文集』卷四三の「記異」に當るもので、『廣記』採入に際して削除がある。ところが「長恨歌」は誰の目にも明らかに白居易の作品であるにもかかわらず出處の注記がないのは、まず單行からの採收の可能性が大きい。まして白氏自身「與元九書」でいうように「及再來長安、又聞有軍使高霞寓者、欲聘倡妓。妓大誇曰、我誦得白學士長恨歌、豈同他妓哉。由是增價。」といった狀況であったから、單行していたことは疑えない。そしてそのばあい、陳氏が『元白詩箋證稿』の首章で唐代傳奇において「傳」と「歌」「詩」とに密接な關係があることを考證したごとく、これはその典型的な例で、『白氏文集』に見え、『廣記』に見えるように、「傳」と「歌」とが一組になって通行したにちがいない。以上は情況證據から言えることである。

しかし「長恨歌傳」そのものを見たばあい、『英華』所引のものは基本的に『白氏文集』所收の文と一致するのに対して、『廣記』所引のものは「傳」の「跋」ないし「後序」の部分が、文集・英華本の一七二字を四七字に端折られてほんの附けたりになっている。いま兩文を引く。

其年夏四月、南宮晏駕。元和元年冬十二月、太原白樂天、自校書郎尉于盤屋、鴻與瑯琊王質夫家于邑。暇日相携遊仙遊寺、話及此事、相與感歎。質夫舉酒於樂天前曰、夫希代之事、非遇出世之才潤色之、則與時消沒、不聞于世。樂天深於詩、多於情者也。試爲歌之如何。樂天因爲長恨歌。意者不但感其事、亦欲懲尤物、窒亂階、垂於將來者也。歌既成、使鴻傳焉。世所不聞者、予非開元遺民、不得知。世所知者、有玄宗本紀在。今但傳長恨歌云爾。——文集・英華本

餘具國史。至憲宗元和元年、盤屋縣尉白居易爲歌、以言其事。並前秀才陳鴻作傳、冠於歌之前、目爲長恨歌傳。

これではほとんど後序を切捨てたに近い。このように話の部分のみを重視して、作者の序や議論の部分を省くやりかたは、『廣記』が白氏の「記異」を「王裔老」として引く個所でも全く同じである。少なくとも『白居易集』に出る二篇の作品に對するこのような共通した省略の方法は、「長恨歌・傳」が作者たちの生存中に單行になった際の省略と見るよりも、『廣記』編者の手法と考えた方がはるかに蓋然性が高いだろう。そして後序の縮めかたを見るに「前秀才陳鴻云々」と書いているが、これは明らかに『白氏長慶集』にいう「前進士陳鴻撰」を承けたものである。

魯迅はこれを陳鴻の自稱とするが、作品製作の時點での自稱であったものが、白居易ないしは元稹にそのまま認められたものであるか、あるいは白居易ないしは元稹が『文集』編纂時に與えた他稱であるかである。いずれにしても「前秀才陳鴻云々」は『廣記』の編者が『白氏長慶集』に據って採録したことを強く示唆するものであって、この文脈の中では陳鴻の直接的な自稱とは考えられない。となれば『廣記』卷四八六の出處不記は單なる失注ということになる。かりにそれでも單行から採録されたとするならば、單行のものもとは『白氏長慶集』から當該部分をそっくりそのまま切取った形のものであったにちがいない。魯迅は「稗邊小綴」で唐代すでに英華本と廣記本の詳略二本があったのかと疑っているが、それらはともに『白氏長慶集』に歸することは疑いのないところである。

詳略二本はむしろ文集・英華本と麗情集本との問題であろう。張君房撰『麗情集』はすでに亡んで、後人の輯佚本がごく僅かな作品を集めているにすぎない。張君房は大中祥符・天禧（一〇〇八—一〇三二）以前の人といわれ、『英華』は太平興國七年（九六三）に編纂をはじめ、雍熙三年（九七五）に完成を見たから、『英華』に少し遅れるかもしれないが、ほとんど時代はちがわない。いま明版『英華』附刻の麗情集本が宋初の『麗情集』所收の形をどれだけ傳えているか

ということは解決不可能なので措くとして、二本をいちおう比較してみる。文集・英華本は約一一五〇字、麗情集本は約一二五〇字と字数では百字足らず麗情集本の方が増えているにすぎないし、もちろん話の内容もそれほど交らないのだが、その表現となると、どちらかがどちらかを粉本にしてほとんど書き替えたというほど違っている。麗情集本の方が場所によっては描寫が細密で、文集・英華本の硬い表現の部分が、常套的ないまわしになって、口調もずっとなめらかであるが、その分全體の印象としてはかなり通俗的である。ほかに文集・英華本には「唐天子」ということばがあるのに對して、麗情集本には「漢天子」という表現がある。また文集・英華本は時謠を引く（これは「東城老父傳」も同じ）が、麗情集本は引かない。一方麗情集本には、文集・英華本にない議論の文字、教訓めいた言説が添えられている。楊貴妃の死の場面の後（『史略』が引用する部分の末尾、叔向母と李延年のことば）と物語の結尾とに。結尾の部分は次のように云う。

嘻、女德無極者也。死生大別者也、故聖人節其慾、制其情、防人之亂者也。生感其志、死溺其情、又如之何。これら二本について陳氏は前の『元白詩箋證稿』第一章の末に云う。

取兩本傳文讀之、卽覺通行本引者注、卽文集本。之文較佳於麗情本。頗疑麗情本爲陳氏原文、通行本乃經樂天所刪易。議論逐漸減少、此亦文章體裁演進之跡象。其後卒至有如連昌宮詞一種、包括議論於詩中之文體、而爲微之天才之所表現者也。寅恪嘗以爲搜神後記中之桃花源記、乃淵明集中桃花源記之初本。此傳或亦其比歟。

陳氏は、麗情集本が陳鴻の原文で、文集本は白居易の刪改を経たものではないか、議論がしだいに少なくなるのは文體のスタイルの進化の跡であるからという。確かに文學における一つの文體ないしジャンルは藝術的に餘計なものを削ぎ落す形で完成してゆくのが、巨視的に見たばあい原則ではあろう。小説における議論の文字は、唐代傳奇がそこ

から派生した、文體上の一つの母胎である史傳が、傳奇作品に與えた母斑である。したがって小説史の發展の方向によつては、あるいは進化の指標となりえたかもしれない。ところが中國の小説史は後にこの議論の文字を固定化してしまい、ある種の小説ではむしろ一種の形式とさえなつてしまつたから、議論の文字の多寡は進化の指標とはなりえない。また他方同じ唐代でも記に由來する志怪的作品にはいわゆる議論はない。まして作品・作者個別の相で見ればあいはなおさらであつて、議論の多寡は製作者が史傳的規範をどれだけ意識してゐたかによつて決まる問題である。

議論が少ないからといって、それが直ちに優れた作品であるわけはなく、進化した作品というわけにもいかない。議論があつても小説としての完成度の高い作品はあるし、なくても完成度の低いものもある。また陳氏が想定するのは逆のばあひも充分ありうるのであつて、いくら完成度の高い作品でも通俗的なレヴェルで改變を受ければそれなりなものになつてしまう。それを一概に退化と決めつけることはできないけれども、質が變つたり、文學的價値が落ちてしまふのは否定できない。わたしも文集・英華本の方が麗情集本に比べて上等だとは思ふが、それは陳氏の想定とはむしろ反對の過程を経たためではないかと思ふ。それを論證するのはたいそう難しいが、この問題を考えるのに手がかりになるかもしれないと思われるものが一つある。それは麗情集本の跋である。跋文に云う。

元和元年を脱す年冬十二月、太原白居易慰尉の誤于塾屋。予與琅邪王質夫家仙游谷、因暇日携手入山、質夫於道中語及於是。白樂天深於思者也、有出世之才、以爲往事多情而感人也深故爲長恨詞以歌之、使鴻傳焉。世所隱者、鴻非史官不知、所知者有玄宗內傳今在。予所據王質夫說之爾。

まずこの文は「長恨歌」の作者を稱して「白居易」と言い「白樂天」と言う。白居易と陳鴻の關係から考へて、陳鴻が「白居易」と書くことはありえない。傳寫の過程で抄者が誤つたのでなければ、名と字とを共に擧げていふのは後

代の人間にちがいない。そして終りに「世所隱者、鴻非史官不知、所知者有玄宗内傳今在」とあるのは、その前年貞元二十一年進士に合格して、「始めて閑居して志を遂げ」、「大統紀」を書きつつあった人の言とはとても思えない。もっともここは小説的修辭が問題となるところであるから、そのように韜晦したことも考えられる。だが同じ韜晦するにしても、「鴻非史官不知」と書くよりも、文集本のように「世所不聞者、予非開元之遺民不得知」と記す方がよほどすっきりしていて歴史家陳鴻に適しい。またこの跋では「長恨歌・傳」の話を語ったのは王質夫一人のように書いてあるが、これはまさしく「鴻非史官不知」と呼應させんがためである。これはおそらく陳鴻が史に志のあった人であり、彼に『大統紀』三十卷の著書のあることを、すでに考慮に入れることのなかった人間の手による刪改であろうと思われる。したがって刪改は必ずしも張君房の手になるとは限らないけれども、やはり『史略』が「蓋後人又増損之」というのに従うのがよいように思う。

なお、『文集』と『英華』を比較したばあい、文集本には脱字等があり、英華本には宋代の上諱による改易があるが、テキストとしては英華本の方がすぐれる。これは書の系譜としては『文集』が古く由緒があるのだが、白氏の文は唐代からすでに廣く流行したため、多くの傳寫と翻刻の過程を経、したがって脱誤もそれにつれて多く生じた。それに對して『英華』は宋初に於ける『文集』の一本を固定してしまい、大部の書であったために傳寫翻刻も『文集』に比べて少なく、明版に至るまで却って變動が少なかったためだろう。もっともそうはいっても作品全體に及ぶような脱誤はなく、兩者の差異はごく僅かである。

『唐文粹』九十五』の上に、初版から七版まで「見」字があり、訂正版以後削られた。

『師弟答問集』第八頁云、「魯迅答云」C「國忠奉鬘盤水……」ソレハ文章ニ間違ガアリマス。實ハ「國忠鬘盤水加劍……」トシナケレバナリマセン。大臣ガ罪人ニナツタカラ牛ノ毛、デ拵ヘタ縵、（繪を略す）デ絲ノモノニ替ヘ、盤ノ中ニ水ヲ入レ、盤ノ上ニ劍ヲ加ヘ、其レヲ捧シテ帝ノ所へ行テ「何卒、殺シナサイ」ト云フソウダ。劍ハ自分ヲ殺ス道具、盤中ノ水ハ帝ガ自分ヲ殺シタ後ノ御手ヲ洗フニ使カヒマス。頗ル考ヘトミイタ禮節デス。ソレハ漢ノ禮制デ、ケレト本當ニ行フタノデハ、ナイデシヨウ。出典ハ『漢書』ノ「鬘錯傳」ノ注ニアリマス。又『全集』第三卷、三三〇六二五増田涉宛書簡。賈誼『新書』卷二、階級云、古者大臣有坐不廉而廢者、不謂不廉、曰簠盤不飾。……故貴大臣定其有罪矣。猶未斥然至以呼之也。尙遷就而爲之諱也。故其在大誦大詔之域者、聞諱詞、則白冠鬘、盤水加劍、造請室而請其罪爾。上不執縛係引而行也。』『漢書』では賈誼傳に「天下初定、制度疏闊。諸王僭僣、地過古制、淮南、濟北王皆爲逆謀。誼數上疏陳政事、多所欲匡建、其大略曰」として引かれる中に右の一條も出る。右の一文の後『漢書』傳文はいう。「是時丞相絳侯周勃免就國、人有告勃謀反、逮繫長安獄治、卒亡事、復屬邑、故賈誼以此譏上。上深納其言、養臣下有節。是後大臣有罪、皆自殺、不受刑。至武帝時、稍復入獄、自甯成始。」『晁錯傳ノ注』というのはいちがい、魯迅は『漢書』のこの部分を念頭に置いていたのであろう。

増田涉譯『支那小説史』注云、國忠奉鬘盤水 大臣が罪人になったのだから、絹絲の紐をやめて、冠の紐を牛の尾でつくつたものに代へたのである、自ら罪人であることを表明したるし。大臣が皇帝に殺して下さいといふ時の禮式で、盤水の上には劍を載せる、この劍で殺して下さい、そして不淨な御手をこの盤の水で洗ひ清めて下さいとの意、漢の禮制。だが實は國忠は亂兵に殺されたのであつて、文章の修飾上こんな勿體らしいことを書いたまでである。

17 白行簡字知返、以至『繡襦記』

寫印本『大略』九云、傳奇記傳、此外尙多、其顯著者有白行簡之李娃傳（廣記四百八十四）、記滎陽巨族之子、溺于長

安倡女李娃、困頓貧病、後爲李娃所拯、擢第受成都府參軍。元人取其事爲曲江池、明人則以作繡襦記。第九篇「屬於逸事之前一類者」の後部に置かれてゐる。鉛印本は「史略」の「累遷司門員外郎主客郎中……年蓋五十餘」を「累官度支郎中、嘗從兄赴謫所」に作る他、基本的に「史略」に同じ。

「小説的變遷」第三講云、當時還有一個著名的、是白居易之弟白行簡、做了一篇『李娃傳』、說的是、滎陽巨族之子、到長安來、溺于聲色、貧病困頓、竟流落爲挽郎。——挽郎是人家出殯時、挽棺材者、并須唱挽歌。——後爲李娃所救、并勉他讀書、遂得擢第、官至參軍。此篇對於後來的小説、也很有影響、如元人的『曲江池』、明人薛近兗的『繡襦記』、都是以它爲本的。『長恨歌傳』の記述の後に續く。

『唐宋傳奇集』稗邊小綴云、貞元十一年、太原白行簡作『李娃傳』、亦應李公佐之命也。是公佐不特自製傳奇、且亦促齊輩作之矣。『傳』今在『廣記』卷四百八十四、注云出『異聞集』。元石君寶作『李亞仙花酒曲江池』、明薛近兗作『繡襦記』、皆本此。胡應麟『筆叢』四十一論之曰、「娃晚收李子、僅足贖其棄背之罪、傳者亟稱其賢、大可哂也。」以『春秋』決傳奇獄、失之。行簡字知退（『新唐書宰相世系表』云、字退之）、居易弟也。貞元末、登進士第。

元和十五年、授左拾遺、累遷司門員外郎主客郎中。寶曆二年冬、病卒。兩『唐書』皆附見「居易傳」（舊一六六新一九一）有詩二十卷、今不存。『少室山房筆叢』卷四一、莊嶽談談下云、繡襦記事出唐人李娃傳、皆據舊文。第傳止稱其父聚陽公、而鄭子無名字、後人增益之耳。以下に所引の文が續く。

『舊唐書』卷一六六白居易傳云、白居易字樂天、太原人。北齊五兵尚書建之仍孫。中略。初、建立功於高齊、賜田於韓城、子季家焉、遂移籍同州。至温徙於下邳、今爲下邳人焉。中略。

行簡字知退。貞元末、登進士第、授祕書省校書郎。元和中、盧坦鎮東蜀、辟爲掌書記。府罷、歸潯陽。居易授江

州司馬、從兄之郡。十五年、居易入朝爲尙書郎、行簡亦授左拾遺、累遷司門員外郎、主客郎中。長慶末、振武奏水運營田使賀拔志言營田數過實、詔令行簡按覆之、不實、志懼、自刺死。行簡寶曆二年冬病卒、有文集二十卷。行簡文筆有兄風、辭賦尤稱精密、文士皆師法之。居易友愛過人、兄弟相待如賓客、行簡子龜兒、多自教習、以至成名。當時友悌、無以比焉。

『新唐書』卷一九白居易傳云、白居易字樂天、其先蓋太原人。北齊五丘尙書建、有功於時、賜田韓城、子孫家焉。又徙下邳。中略。

行簡字知退、擢進士、辟盧坦劍南東川府。罷、與居易自忠州入朝、授左拾遺。累遷主客員外郎、代韋詞判度支、校、進郎中。長慶時、振武營田使賀拔志歲終結課最、詔行簡閱實、發其妄、志懼、自刺不殊。行簡敏而有辭、後學所慕尙。寶曆二年卒。

『登科記考』卷一七云、元和二年丁亥、進士二十八人。白行簡。唐詩紀事。「白行簡字知退、敏而有詞。元和二年登第。爲度支郎中。」行簡小字阿憐、見樂天同宿湖亭詩注。戴望舒『唐宋傳奇集』校讀記云、按、『唐詩紀事』四一、「行簡字知退、敏而有詞。元和二年登第、爲度支郎中、寶曆二年卒。」聞行簡思賜章服、喜成長句寄之詩云、「吾年五十加朝散、爾亦今年賜服章。齒髮恰同知命歲、官衙俱是客曹郎（予與行簡俱年五十始著緋、皆是主客郎中）。魯迅は『舊唐書』に依つて「貞元末進士第」と書いたのだが、「元和二年」でなければならぬことを指摘したもの。戴氏の白行簡の生平に關する更に詳しい考證は同じく『小説戲曲論集』に收める「讀々李娃傳」にある。それによると行簡の生卒は代宗大歷十一年丙辰（七七六）——敬宗寶曆二年丙午（八二六）、享年五十一とする。なお『唐詩紀事』が同じく白居易の「聞行簡思賜章服」詩を引きながら「度支郎中」とするのは杜撰を免かれない。

王國維『曲錄』卷二、雜劇部上云、李亞仙詩酒曲江池一本元曲選本、古名家雜劇本 右元石君實撰、君實平陽人。（君實は君實の

誤。又卷四、傳奇部上云、繡襦記一本六十種曲本、曲海目作鄭若庸撰、誤。明薛近哀撰。傳奇彙考、虛舟作玉玦、舊院人惡之、共餽金求薛近哀作此、以雪其事。語本靜志居詩話。曲品、嘗聞玉玦出而曲中無宿客、及此記出而客復來。詞之足以感人如此。新版『全集』注(二五)云、『繡襦記』、一說爲明徐霖所撰。莊一拂『古典戲曲存目彙考』(一九八二・上海古籍出版社)卷九云、薛近哀、字百昌、江蘇武進人。萬曆進士、歷官浙江、河南布政使、以清介絕俗聞。『繡襦記』演鄭元和、李亞仙事。本唐人白行簡『李娃傳』、並傍采前人雜劇而作。按『靜志居詩話』云、「中伯嘗撰『玉玦』詞、以誦院妓、一時白門楊柳、少年無繫馬者、羣妓患之。乃釀金數百、行薛生近哀作『繡襦記』以雪之。秦淮花月、頓復舊觀。」中伯即鄭若庸。周暉『金陵瑣事』則謂「徐霖作」、或爲別一本。開明書店翻刻六十種曲本、據鄭振鐸說、卽定爲徐作。

行簡又有『三夢記』一篇、以至所引『三夢記』

六一六

寫印本『大略』、「小説的變遷」ともに『三夢記』には言及しない。鉛印本は『史略』に同じい。

『唐宋傳奇集』稗邊小綴云、傳奇則尙有『三夢記』一篇、見原本『說郛』卷四。其劉幽求一事尤廣傳、胡應麟『筆叢』(三十六)又云、「『太平廣記』夢類數事皆類此。此蓋實錄、餘悉祖此假託也。」案清蒲松齡『聊齋志異』中之「鳳陽士人」、蓋亦本此。

『說郛』于『三夢記』後、尙綴「紀夢」一篇、亦稱行簡作。而所記年月爲會昌二年六月、時行簡卒已十七年矣。

疑僞造、或題名誤也。後略。『筆叢』卷三六には「白行簡三夢記云」として魯迅所引と同じく第一夢を引く。文字に異同あり、そして「右載

陶氏說郛」と述べてその後に所引の數句がある。また續いて「其第二夢記元白梁州詩」と書いて詩を引き、「其第三夢女巫事亦奇」とする。

「三夢記」引文中「中其疊洗」の「中其」二字を三版一七版、十一版、五七年版全集「其中」に誤る。涵芬樓排印明抄本は「佛寺」を「佛堂院」、「破迸散走」を「破迸走散」に作る。『唐宋傳奇集』収録は明抄本に同じなので、おそらく魯迅の筆誤であらう。

(一九八九・七・三一。一〇・一九補)